

多文化共生推進委員会 第1回委員会会議録

【日時】 平成26年1月17日（金）18:30～20:30

【場所】 八王子スクエアビル11階 国際交流室

【出席者】 委員 ◎森茂委員、岡添委員、児野委員、シュレスタ委員、館山委員、谷川委員、
張委員、平野委員、関委員、吉本委員、マダウラ委員、渡辺委員
事務局 市民活動推進部 伊藤部長、多文化共生推進課 平本課長、
同課 櫻井主査、同課 中島主任、同課 伊藤主任

【欠席者】 なし

【公開・非公開の別】 公開

【傍聴人の数】 0人

【配付資料】 ・八王子市多文化共生推進委員会 第1回委員会次第
・八王子市多文化共生推進プラン
・八王子市多文化共生推進委員会 委員名簿
・八王子市多文化共生推進委員会開催要綱
・審議会等会議の公開について

1. 開会
・配布資料の確認
2. 市民活動推進部長挨拶
3. 委員の紹介（事務局より）
4. 多文化共生推進委員会について（事務局より）
・委員会の目的や座長について
・今後の進め方
※「八王子市多文化共生推進委員会開催要綱」を基に説明
5. 座長の選任
委員の互選により座長を森茂委員に決定。

座長

皆様のご協力を得て進めていきたいので、よろしくお願いします。

2002年に総務省からの報告書により、八王子市では先駆けて、市民会議を設置し、議論を重ねてプラン策定までに至った。多摩地域では立川市に次いで2番目。私もいろいろなところで紹介しているが、皆さんに興味を持っていただいている。プランを絵に描いた餅にしないよう、実現に向けて委員会として頑張りたい。

6. 委員会の公開（事務局より）
※「審議会等会議の公開について」を基に委員会の公開（傍聴、議事録、委員名簿）について説明

7. 多文化共生推進プランの取組みについて（事務局より）

- ・プラン検討の経過
- ・本年度の取組み

※「八王子市多文化共生推進プラン」を基に説明

委員

市としていろいろな事業を実施した後の評価はどのように考えているのか。

事務局

すぐに評価ができるものとそうでないものがある。意識の面は、時間がかかりなかなかすぐに評価はできない。アンケートなどをもって経年的に評価していかなければならない。指標に対していろいろな考え方があると思うので、次回以降、進捗状況を確認しながら、どのように評価していくか検討し、ご意見をいただきたい。

座長

今回は、市への提案など何か成果を出すためのものではなく、今後の進捗状況について意見を交換しながら、イメージを共有していく場なので、この点を確認したい。

このプランでは、「絵に描いた餅」とならないよう、事業ごとに担当する所管が明記され、あやふやにならないようにされている。定期的に各所管に進捗状況を確認し、事務局でまとめてもらうこととなっている。

プランを進めていくのは市の多文化共生推進課が中心となるが、もう1つ大きな存在で、市民と行政を結ぶ中間支援組織である八王子国際協会からも、簡単にご説明を願いたい。

- ・八王子国際協会についての説明（岡添委員より）

※「八王子市多文化共生推進プラン」を基に説明

8. 各委員から

- ・多文化共生について（各3分程度）

座長

それでは、今日の本題となるが、時間の関係で1人3分程度、自己紹介を兼ねて多文化共生について一言ご意見をいただきたい。

委員

八王子国際協会の理事長をしている。当協会のビジョンは、多文化共生社会の実現であり、市と連携しながらめざすのが務めだと考えている。プランの中にも国際協会の名前も入っているので期待に応えたい。

委員

八王子国際協会では、語学ボランティアや日本語ボランティアの養成講座、サポートデスクなどの生活相談を担当している。

外国人の数は、日々、日本の社会の情勢で変化しており、震災の後は、日本語教室の希望者が

減るなど世の中の流れを感じている。外国人と接しているといろいろ勉強させられることが多く、日本の社会でその外国人の豊かな経験を生かし、還元していただけたらと思っている。

サポートデスクのことを紹介すると、以前は、日本語教室の紹介が多かったが、6年目を迎え、生活相談が多くなってきた。私たちは、弁護士や行政書士の専門家ではないが、そういう機関につながるのが私たちの仕事という国際協会の役割が認知されてきたと感じている。

委員

ネパール出身で、日本に住んで27年、八王子に来て22年である。多文化共生は今後、日本の社会で非常に重要である。少子高齢化、人口の減少、社会のグローバル化などはすでに進展している。ヒト・モノ・カネ・情報の行き来がスピード化していく中で、外国人が増えていくと、文化や価値観のぶつかり合いは、今後ますます増えていくことが予想される。隣に住んでいる人が外国人かもしれない。そのような中、生活の面だけでなく、仕事の面でもいかにスムーズに認め合う関係をつくれるかというのが多文化共生社会だと思う。

安倍政権も、将来性を考え、今後、仕事などの面から、海外との関係を作れるかを考えている。言い換えれば、お互い文化の違いを認め合い、外国人を差別化せず、対立しない社会をつくることが求められるだろう。

これまでの自分の仕事などの経験を少しでもお話しし、皆さんと共有しながら進めていきたい。

委員

自分のバックボーンをお話すると、JICA（国際協力機構）の職員で、途上国を支援することを仕事としている。インドネシアでの海外経験がある。プラン策定後、この1年で印象に残っていることをお話しすると、外国人と話すことに皆さんかなり興味を持っているようだ。現在、高校でキャリア教育のボランティアをしているが、進学校もそうでない学校も同様である。

「韓流」をきっかけに韓国語の勉強をはじめたり、「中国に興味があるんだ」という子は、きっかけが横浜中華街に行ったことだったりなど、感受性豊かな若い生徒たちは、ちょっとしたきっかけで芽が開く。また、柔道・剣道など日本の武道などに取り組み、日本のことを知っている外国人の話を知ると、日本に住んで生活はしているが、接点が少なくもっともっと日本のことを知りたいと思っているようだ。先ほど市や協会から、防災やお祭りなど、さまざまな交流の事例が紹介されたが、そのようなちょっとしたきっかけが増えれば、お互いの理解が進むのではないかと思う。

委員

最初日本に来た頃は、日本語があまり話せなくて困ることが多かったのですが、その後は、言葉の壁を乗り越えて、周りの人をお手伝いできることはないか考えてきた。10年ほど前からは、今はさまざまな事情で閉鎖してしまっているが、ある学習支援教室で、学習支援をしたり、学校に行ったり、進学のサポートなどのいろいろな活動に携わった。自分が役に立つことができたのはうれしかった。現在は、桐田小学校の学校サポーターとして教育センターに登録して、学習支援や生活支援、コミュニケーションの支援などをPTAからの要請を受けて行っている。

また、仕事などを通じて、様々な国の出身のお母様と接する機会が多いが、学校のことや子育ての悩みなどを持っているので、自分の立場で、できるだけそのような方々の役にも立てるように動いている。

もう1つお話ししたいのは、特に東京は多文化共生が進んでいて、中国の学生が日本で医学

を^{まな}学び^{だいがくいん}大学院まで^{しんがく}進学する^{がくせい}学生も^ふ増えているが、^{まな}学んだ^{のち}後、^{ぼこく}母国へ^{かえ}帰ってしまうことが^{おほ}多い。確かに^{こくさい}国際化や^{かいかつ}生活の面では^{めん}課題があることも^{かん}感じる。日本に^{にほん}来た^き外国人^{がいこくじん}留^{りゅう}学生が^{さいしん}最新の^{がくもん}学問を^{まな}学んで^{ぼこく}母国へ^{かえ}帰ることも^{わる}悪くないが、^{わたし}私は^{にほん}ぜひ日本に残って^{のこ}活躍^{かつやく}してほしい。

^{はちおうじ}八王子市は、^よすごく良くなってきているので、^{たぶん}多文化^か共生^{きょうせい}を^{まえ}前に進めるために^{みな}これからも皆で^{ちから}力を^あ合わせて^{がんば}頑張りたい。

委員

^{わたし}私も^{ちゅうごくしゅつしん}中国出身で、^{ねん}10年ほど^{まえ}前に^{はちおうじ}八王子に^き来た。震災^{しんさい}後から^{はちおうじ}八王子市立の^{がくどうほいくじょ}学童保育所で^{はたら}働いている。子どもたちが^{ちゅうごくご}中国語に^{きょうみ}興味を示す^{しめ}場面などを^め目にする^{きかい}機会が多い。やさしい^{ちゅうごくご}中国語講座を^{おお}したり、^ぎ太極拳や^{たいきよくけん}餃子づくりの^{ぎょうざ}体験なども^{おこな}行っている。多文化^{たぶん}共生^{かきょうせい}という^{むずか}と難しいが、^{さいり}国際理解^{こくさいりかい}教育を^{にちじょうせい}日常生活の中で、^{なか}子どもたちが^み身に^{つけ}付けられると^よ良い。今は^{いま}国同士^{くにどうし}の関係が^{むずか}難しく^{わたし}なっているが、^こ子どもは、^{こくせき}国籍は^{かんけい}関係がない。テレビなどを見て、^{ちゅうごく}中国は^す好きではないが、^{わたし}私のことは^す好きだと言ってくれる。私の^{すがた}姿を通して^こ子どもは、^{ちゅうごく}中国の人や^り文化を^{かい}理解してくれている。これからも^{いしき}意識しながら^{がんば}頑張っていきたい。

委員

^{ぼうさい}防災が^{ひと}1つの^てテーマだった^{だい}第3期^きの^{がいこくじん}外国人^し市民会^{かい}議から^{ぶらん}この^{さくてい}プランの^{たずさ}策定に^{とう}携わっている。^{きょうしつ}東京消防^{しょうぼう}庁を^{ねん}10年前に^{たいしよく}退職^{たいしよく}後、^{おこな}さまざまな^な活動に^わ携わってきたが、²⁰¹¹2011年の^{ひがし}東日本^{にほん}大震災^{だいしんさい}を^き契機^きに^{きょうかい}協会の^{ぼうさい}防災に^{ぶろじえくとち}プロジェクト^ちチームが^あ立ち上がり、^{さんか}そこに^{さいがいじ}参加した。災害^{さいがい}時の^{がいこくじん}外国人^し支援^{しえん}を^{けん}検討し、^{じつげん}実現に向けて^{かつどう}活動している。

^{がいこくじんりゅうがくせい}外国人留^{りゅう}学生や^{がいこくじん}そのほかの^{おほ}外国人も^{じぶん}多くは、^{くに}自分の^{ぼうさいくんれん}国で^{おこな}防災訓練^{けいけん}を行^{ちゅうかい}った^{ちゅうかい}経験^{ちゅうかい}がなく、^{ちゅうかい}町会^{ちゅうかい}の^{ぼうさいくんれん}防災訓練^{ぼうさいくんれん}は、^{さんか}参加して^よ良かったという^{こえ}声を^{こえ}たくさん^{こえ}いただいている。

^{みな}皆さんが^{みな}ご存^{ぞん}じのとおり、^{とうきょう}東京^{ちゅうが}直下^{ちゅうが}型^{しん}地震^{しん}など、^{ひがし}かなりの^{しん}被害^{しん}が^{ちゅうてい}想定^{しん}される^{ちゅうてい}地震^{しん}が^よ予想^よされている。^{はちおうじ}八王子市は^{ひがく}比較的^{ちい}安全な^{ちい}地域^{ちい}といわれているが、^{とうきょう}東京で^{しん}仮に^{しん}震度^{しん}5が^{はっせい}発生^{はっせい}すると、^{じょうほう}情報^{じょうほう}収^{しゅう}集^{しゅう}の^{しゅうしゅう}困難^{しゅうしゅう}など、^ささまざまな^さことが^さ予想^さされる。現在^{げん}、^{こくさい}国際^{こくさい}協会^{こくさい}の^{ぼうさい}防災^{ぼうさい}委員会^{いんかい}で^し仕組^しみ^しづくり^しを行^{おこな}っている。外国人も^{がいこくじん}安心して^{あんしん}暮^くらせる^くまちの^{じつげん}実現^{こん}に^ご今後^{がん}とも^{ばん}頑^{ばん}張^{ばん}りたい。

委員

^{かんこくしゅつしん}韓国出身^{ねん}で、^{がいこくじんし}2006年^{かいぎ}の^{いん}外国人^{さんか}市^{さんか}民^{さんか}会^{さんか}議^{さんか}から^{いん}委員^{いん}として^{さんか}参加^{さんか}している^{いん}ので、「多文化^{たぶん}共生^{かきょうせい}推進^{いん}プラン」は、^{おほ}よく^{おほ}できた^{おほ}と思^{おほ}っている。「外国人^{がいこくじん}市^し民^{しん}による^ねネットワーク^ねの^わ構築^わ支援^わ」や「外国人^し市^{しん}民^{しん}の^{じりつ}自立^{しやかいさん}と^{うな}社会^{うな}参加^{うな}を^{がいこくじん}促^きす^き外国人^きキー^ーパー^ーソン^いの^い育成^い」は、^{わたし}私が^いずっと^い言い^い続^いけて^いきた^いこと^いである。今年^{ことし}は^{ちゅうごく}中国^{かんこく}と^と韓国^とに^く取^くり^く組^くんで^くいる^くこと^くなので、^{たの}とても^{たの}楽^{たの}しみに^{たの}している。

^{はじめ}はじめは、^{りゅうがく}留^に学^にで^に日本^にに^に来^にて^にいた^にが、^{その}その^{とき}時^{かんこく}の^{とも}韓国^{とも}の^{とも}友^{とも}達^{とも}は、^{そつぎょう}卒^{そつぎょう}業^{そつぎょう}後^{そつぎょう}に^{かえ}帰^{かえ}って^い行^いった。^{わたし}私が^に日本^に人^にと^に結^に婚^にして^に初^はめ^はて^は八^は王^{ちゅう}子^{おう}市^しに^き来^きた^きとき^きは、^{かんこくじん}韓国^し人^しの^あ知^あり^あ合^あい^あを^{だれ}誰^{だれ}も^し知^しら^しず、^{きんじょ}近^{きんじょ}所^{きんじょ}の^{やきにく}焼^{やきにく}肉^{やきにく}屋^{やきにく}の^{おばさん}お^おば^おさん^おが^{かんこくじん}韓国^し人^しの^あ知^あり^あ合^あい^あ第^{だい}1^{ごう}号^{ごう}と^なった。^ま全^まく^ま知^まり^ま合^まい^まが^ななく、^ずず^ずと^ず家^あに^いる^いの^いも^い大^{おほ}変^{おほ}な^{おほ}ので、^とと^とに^とか^とく^と暇^{ひま}が^ああ^あつ^あて^あは^あい^あけ^あない^あと^お思^おった。^た訪^たね^たて^たく^たる^た人^{ひと}も^いい^いない、^あ遊^あび^あに^い行^いく^いと^いこ^いろ^いも^いな^いい^いので、^に日本^にで^{せい}生^{せい}活^{せい}し^{せい}て^{せい}い^{せい}く^{せい}た^{せい}め^{せい}に、^し仕^し事^しを^しし^しな^しけ^しれ^しば^しと^し思^おい、^さ探^さし^さて^さい^さた^さと^ころ^こ、^{こくさい}国^{こくさい}際^{こくさい}友^{こくさい}好^{こくさい}ク^{こくさい}ラ^{こくさい}ブ^{こくさい}を^あ朝^あ日^あ新^あ聞^あで^あ見^あつ^あけ、^{かんこくご}韓^{かんこくご}国^{かんこくご}語^{かんこくご}の^{ほんやく}翻^{ほんやく}訳^{ほんやく}の^{ぼらん}ボ^{ぼらん}ラ^{ぼらん}ン^{ぼらん}ティ^{ティ}ア^{ティ}も^いで^いき、^{かんこく}韓^{かんこく}国^{かんこく}の^な仲^な間^なも^さ探^させ^さる^さか^さと^お思^おい^お必^お募^おし^おた^おが、^{そこ}そ^こで^こも^こ韓^{かんこくじん}国^{かんこくじん}人^{かんこくじん}第^{だい}1^{ごう}号^{ごう}だ^{ごう}った。^{せつじつ}切^{せつじつ}実^{せつじつ}に^{どうこくじん}同^{どうこくじん}国^{どうこくじん}人^{どうこくじん}の^ねネ^ねッ^ねト^ねワ^ねー^ねク^ねの^{ひつようせい}必^{ひつようせい}要^{ひつようせい}性^{ひつようせい}を^{かん}感^{かん}じ^{かん}た。

^し市^しに^{ていげん}提^{ていげん}言^{ていげん}し^{ていげん}ても^{ていげん}な^{ていげん}か^{ていげん}な^{ていげん}か^{ていげん}同^{どうこくじん}国^{どうこくじん}人^{どうこくじん}の^ねネ^ねッ^ねト^ねワ^ねー^ねク^ねが^な実^な現^なし^なな^なか^なつ^なた^なが、^{その}その^{よう}な^{よう}な^中中^な、^{自分}自^じ分^{ぶん}で⁵5^{ねん}年^{ねん}前^{まえ}に^こコ^こリ^こア^こン^こカ^こル^こチ^こャ^こー^こネ^こッ^こト^こワ^こー^こク^こを^たた^あち^あ上^あげ^あた。韓国^{かんこく}語^ご教^{きょう}室^{しつ}を^はじ^はめ^はて、^{りょうり}料^{りょうり}理^{りょうり}な^おど^おも^お教^おえ^おて^おい^おる。^{こと}言^{こと}語^{こと}を^{こと}習^{こと}う^{こと}こ^{こと}は、^{その}その^国国^のの^{文化}文化^{を知}知^るこ^とと^同じ^であ^る。^韓韓^流流^{など}に^興興^味味^{を持}持^{った}人^なな

どがだんだん集まってきて、少しずつ交流の輪ができてきた。

ニュースなどの政治的なトラブルやヘイトスピーチなどは、韓国語教室に参加している人々と接している私たちにとっては、関係ない世界のこと。みんな韓国が好きで、興味があって参加している。教室の会員の皆さんは、高尾山に行く韓国人観光客に通訳などのお手伝いをしたいと思っている方もいて、非常にいいことだと思う。

国際化が進み、韓国や中国などのドラマが地上波でも流れている。このような社会の流れの中で、どのように多文化共生を進めるか。私は仕事を通して、ぶつかり合うのではなく、異文化に暮らす人々がどのように理解し、尊重してお互いに深めていくかということを考えている。それには、やはりお互い勉強しないとイケない。私は、言葉は大学で日本語を専攻し、最初からある程度できたが、何もできないで、ボンと外に出されても困ると思う。日本語ができて、やはり同国人のネットワークは必要である。しかし、ネットワークがあっても向こうから来てはくれないので、自分から出ていかないとイケない。そのような外国人にも情報提供などしたい。

委員

年金生活者である。前回の国際化推進プラン検討委員会から参加。働いていたときは、海外の3か国にそれぞれ5年ほど駐在していた。それ以外にもアフリカ、中南米などにも行った。仕事を通して一番感じていることは、会社では「多文化共生」などという言葉は使わなかったが、当時から「グローバリゼーション」などの言葉があり、海外で会社を運営する上で使っていた。一番大事だと考えていたのは「フレキシビリティ」で、日本でこうしているから現地でもそうしろではうまくいかない、柔軟に対応しなければならない。技術者に多いがそういうのではうまく運営できない。経験上、どの国にも良いところと悪いところはあるが、私が2度と行きたくないと思った国はない。人も同様である。お互いにいいところを認め合い、日本が劣っていると思ったところは素直に学ぶ。働かない国もあるが、日本と全く同じことをやるのではなく、その国の国民性を踏まえて、やらなければいけなかった。

この委員会の中にも外国の方が4人ほどいて、同じことを感じられていると思うが、プランの中の基本目標1の「外国人市民も安心して暮らせるまち」はハード面のことで、絶対やっていかなければならず、教育や医療など割とやるべきこととしてはっきりしている。しかし、この10年の計画ということを踏まえると、基本目標2の「国際感覚豊かな市民」を八王子で、どのように育て、どう展開するのか、このことがより重要だと思う。日本人のことを主体に言っていると思うが、外国人も含めて、お互いに良いところを学び、最終的に何か形になるものができたらよいと思っている。

初めてオーストラリアへ海外駐在したとき、子ども2人は、まだ小学生だったが、地元の学校へ行きたいとのことだったので、近くの公立学校に相談しに行ったら、「明日から学校へ来て良い。」とすぐに受け入れてくれることになった。ブレスクールなどで半年とか英語を勉強してからかと思っていたので、そういうことができる国があることにとてもびっくりした。すぐにはまねができないかもしれないが、日本でもそのようなことができるまちづくりを期待している。

座長

公募の市民委員のお2人からお願いします。

委員

主人がスリランカ出身である。自分自身は、静岡県出身の日本人で、2008年に大学を卒業後、

八王子に来て、輸入販売の会社で働いている。現在は、産休中である。

今回、市民委員に応募した理由は、会社も含め、身の回りで外国人に接する機会が多かったからである。

スリランカでは、シンハラ語やタミル語など、なかなか日本人が触れる機会がない言語が話されている。接していて感じるのは、男性は会社に勤めていたり、起業していたりと、積極性があり、社会に出ていけているが、その妻たちは、言葉ができず、文化的にも学ぶ機会がなく、どうしていいかわからない。プランを見たときにとっても素晴らしいと思ったので、それをいかに具体的に落とししていくのか、どう伝えていくのが重要だと思った。何ができるかわからないが、プランの実現に向けて市民の1人として意見を述べたい。

委員

打越在住の八王子市民の1人である。八王子に来て18年ぐらいたつが、退職後、市民として何かをしたいと考え、今回、市民委員として応募した。年に3・4か月は海外へ出ているため、年2回程度のこの委員会であれば、労力があまりかからず、何か私でも力になれるのではと感じて応募した。

私が不思議だと思っているのは、これだけ多くの関連部署、全部署を巻き込んで、多文化共生に取り組むのかということ。普通は他の部署は、いやがるのではないか。住めばどのような人達にもケアすると市が公言しているようなものである。東京都では、普通なのか。

事務局

市によって差があると思うが、八王子市内には、9,000人もの外国人が住んでおり、約3,100人の外国人留学生在が市内の大学等に在学している。26市あるいは都内においても多文化共生を進めていくべき自治体だと思っている。当課が多文化共生の推進を他の所管に働きかけ、取り組んでいくべきだと考えている。課の名前を多文化共生推進課に変えたのもそうであるが、やはり、市として、率先してリーダーシップをとるべきだと考えている。

委員

なぜそのような質問をしたかというと、自分の娘は海外で出産した。皆さん、海外での出産と聞くと、大丈夫かと思われるようだ。多くの親が、帰って来て日本で出産するようにというのではないか。安心できる場所でないと出産はできないと思う。

私が申しあげたいのは、このプランから外国人が、自分の国と同じように生活できるまちをつくっていかうとしているような八王子市のメッセージを感じる。観光で来る人たちというよりは、住む人たちをどうしていくか検討していく会だと思った。

年に2回ということだが、今後とても楽しみにしているので、委員としてお役に立てたらと思う。

座長

中央大学で教えている。教育学が専門である。2006年に総務省が出した「多文化共生の推進に関する研究会報告書」を出発として、各自治体でプランが策定されるなか、八王子市から連絡をいただき、最初は教育についての検討を行うので、協力してほしいとのことだったので、専門でもあり、お引き受けした。その後も次々にさまざまな分野について、議論が進んでいった。専門ではないが、続けて委員を務めさせてもらい、さまざまな分野の方が知恵を出し合い、非常に勉強になった。その間、立川防災館での防災訓練や、市民向けフォーラムなど、さまざまなこと

を体験させていただいた。このようなプランを出したのは、26市では、八王子のほかは立川だけである。市も力を入れて取り組んでいこうとしているので、皆さんもぜひ協力してほしい。

文科省の今の大きなスローガンは、「グローバル人材の育成」である。高校や中学でグローバルハイスクールとして、授業の何分の1かは、英語で行うとしている。文科省が考えているのは英語力の強化だが、この委員会では、もっと身近なところで多文化共生について考えていきたい。

八王子市は、市域23の大学で、留学生を中心に9,000人を超える外国人がいるが、何とか皆さんの知恵をお借りして、いいまちになるよう、多文化共生を推進していければと思う。

私の妻は中国人だが、毎日共生の日々を過ごしている。少しは共生することの難しさを身に染みて分かっているつもりである。

いつも言っているが、マジョリティの日本人の意識が変わらないと駄目である。そのことを大学の授業でも教えている。

これで、だいたい皆さんの背景等が分かったので、次回もどうぞよろしくお願いいたします。

何か、言い残されたことはありますか。

委員

このプランの中で、サポートデスクの件数が年々、減少しているのはなぜか。

委員

リーマンショックや震災の影響などで減った。震災直後は、1か月間ほとんど訪れる人がいない状況だった。その後も日本語教室については、ほとんど相談がなかった。24年度は、大分、以前の件数に戻ってきたが、相談内容は変わってきた。生活相談が増え、日本語教室の案内は減っている。以前は、200件近くあった日本語教室の相談も100件ぐらいになっている。これは、新しく日本に来る外国人が少なくなったということと、ある程度日本語ができるようになった人は、働きに出て行っているということではないか。

委員

日本語の支援をするとところが減っているということか、または、まったく日本語が分からずに来るという人が減っているということか。

委員

国際協会であれば、ここ1.2年は変わっていない。ほかの地域で日本語を勉強していて、転居してきたという人はいらっしゃる。

委員

先日、協会でネパールから来てまだ8か月という若い留学生にあった。日本語を流暢にしゃべるのでびっくりした。留学生は目的を持って日本に来ているので、日本語の習得が早い。

委員

留学生は、基本的に留学するために日本語が必修となっている。一番困っているのは、ご主人の仕事の都合でついてきた人たちである。そのような人たちが減っているということか。

委員

比較的、日本に来る方は、日本語がある程度できる方が増えている気がする。以前は、日本語支援として「話す」、「聞く」が中心であったが、仕事や学校などでのやりとりのためには、「読み」、「書き」が必要であり、ここ2.3年は、日本に長く住むために「読み」、「書き」もしたいというふうにシフトしてきているようだ。

委員

普通の会話はできるが、何かの時には日本人を頼りにしないと行けないのでは、日本人と外国人が同等の関係になっているといえない。いわばサービスを受けている状態である。いかに外国人も積極的に努力して、日本人と同等の仕事をしないと、多文化共生がうまくいかない。

委員

先程、オーストラリアの学校が子どもの受け入れを積極的に行っているなどの良い例が紹介されたが、日本でもそのようになるとよいと思った。

委員

日本語を2か所で教えているが、フィリピンの中学生在が、うまく日本の学校に入らずに帰国して、両親は日本にいますが、祖母のところで、学校に通っている。受け入れがスムーズにいかないこともあるようだ。

委員

日本でも教育委員会や学校の校長先生が、サポートしているはずであり、実際そのような例も知っている。

委員

もしそうであれば、喜ばしいことであるが、学校や先生によるのか。

座長

公立の学校では、日本が「子どもの権利条約」を批准していることもあり、必ず受け入れるはずである。

用意された議題は終了したので、事務局から事務連絡をお願いします。

9. その他

※事務局より事務連絡について説明後、第2回委員会の日程調整

・第2回委員会の日程【平成26年9月26日（金）を予定】

10. 閉会